

再び語気詞としての「其」について

鈴木 直 治

ま え が き

- 1 「其」・「厥」の消長
- 2 語気詞としての「其」の用法
 - 2・1 副詞・連詞と解されている用法
 - 2・2 語気詞としての「其」の特徴
 - 2・3 疑問詞などの前後に
 - 2・3・付1 疑問の文末に
 - 2・3・付2 否定詞の前後に
 - 2・4 「其必」「必」と訳されていることについて
 - 2・5 性状を表わす語の前後に
- 3 「乃」と解されていることについて

む す び

ま え が き

この小論は、私が先に、《金沢大学教養部論集・人文科学篇9（1971）》に、「《書経》語法札記5」として発表したものには、なお至らないところが多かったことに気付いて、このほど、全面的に書き改めたものである。「《書経》語法札記1」として発表した「惟」についての小論も、昨年、全面的に書き改めて、〈再び「惟」について〉として発表した。再度にわたって、この論集に再発表することを認めて下さった論集委員会のご厚意に深謝するとともに、同学の方々からのご教正をお待ちしている。

用例をあげる場合、《書経》は、前稿にならって、《真古文尚書集釈》（加藤常賢、1964、明治書院）の頁数を注記した。また、《詩経》は、その篇名の次に、全篇としての番号、《左伝》は、「漢文大系」本の巻数と頁数とを注記した。

1 「其」・「厥」の消長

「其」(kiəg)は、もともと、その声母牙音系の遠指の指示詞であって、その声母舌音系の近指の指示詞の「之」(tiəg)に対するものであったと考えられる。しかし、その指示の幅は、ややゆるかったものと考えられ、その前文に述べられていることなどを承けて、それを承指するものとして用いられていることが多い。次の例における「其」は、その遠指のものということが出来るものである。

(1) 我行其野，蔽芾其樗。(小雅・我行其野188)

〔「わたくしがあの野に行ったら、枝葉の茂っているあのいやな樗の木。」〕

この例は、「我行其野」の詩篇の篇頭の二句である。それで、その「其」は、承指のものではなく、遠くにあるものを指しているのである。もちろん、直接に手指でもって指しているのではあるまい。自分のよく知っている遠くのを、以心伝心的にこの詩の読者に伝えようとしているわけである。遠指の指示詞のもつ「意指」という指しかたのものである。〕

「其」は、もともと、「箕」(kiθg)の原字の字形を仮借したものであり、甲骨文の中にも、その用例が見られる。この「其」と同系の遠指の指示詞に、「厥」(kiuǎt)がある。《広韻》に、「厥」について、「其也」と解説し、「𠄎」をその古文としてあげている。甲骨文では、「𠄎」と書かれている。

この「厥」と「其」とは、ともに、その指示詞としての働きから転じて、一種の語気を表わすものとしても用いられている。《書経》においては、「厥」は、通例、指示詞として用いられていることが多く、「其」は、通例、語気詞として用いられていることが多い。《爾雅》〈釈言〉にも、「厥、其也」と説かれているが、「其」は、「厥」に較べて、その指示詞としての指示のしかたが少し弱いものであったもののように考えられる。この声母牙音系の遠指の指示詞にも、その指示のしかたの強いものと、弱いものと、二種あったもののように考えられる(注1)。《書経》の中から、「厥」と「其」とが、ともに比較的多く用いられている篇について、その用法別に使用例数をあげれば、下表のようになっている。

〔表1〕

	厥			其		
	指示詞	語気詞	計	指示詞	語気詞	計
堯典	5		(5)		2	(2)
皋陶謨	5		(5)	2	5	(7)
盤庚	14		(14)	3	12	(15)
康誥	16	1	(17)	1	12	(13)
召誥	14	3	(17)		18	(18)

(注1) 古代漢語における遠指の指示詞としては、この「厥」・「其」のほかに、その声母唇音系の「彼」(piar)と「夫」(buag)がある。「彼」は、その指示のしかたが強く、「夫」は、それに較べて、その指示のしかたが弱かったものといえることができる。この両者は、甲骨文の中には見られないが、《書経》・《詩経》などにも、その用例が見られる。

また、この両者は、遠指の指示詞の特徴として、意指にも用いられるが、承指には、通例、用いられない。承指は、通例、中指・近指の指示詞に見られるものである。このことからしても、「厥」・「其」は、遠指の指示詞として、「彼」・「夫」よりも、その指示の幅が、ややゆるかったものと考えられる。拙論：〈「彼」について——古代漢語指示詞札記3——〉・〈「夫」について——古代漢語指示詞札記4——〉《金沢経済大学論集第16巻第2・3合併号(1983)》及び、同論集第17巻第2号(1983)参照。

「厥」は、下表に見られるように、《書経》の〈商周書〉においては、その総字数に対して、1%をこえる高い使用率であったのであるが、《詩経》においては、次第に少なくなつて来ており、その〈国風〉においては、一例も見られないようになっている。

〔表2〕

		商周書	周頌	大雅	小雅	国風	論語
総字数		13,479	1,385	6,589	9,399	10,660	15,917
厥	使用数	141	14	24	1		
	使用率	1.04%	1.01%	0.36%	0.01%		
其	使用数	189	38	91	165	225	267
	使用率	1.40%	2.74%	1.38%	1.75%	2.13%	1.67%

〈商周書〉の総字数と、その「厥」「其」の使用数は、《尚書通検》によって計算し、〈周頌〉〈大雅〉〈小雅〉〈国風〉の総字数は《五経索引》、その「厥」「其」の使用数は、《毛詩引得》によって計算し、《論語》は、《四書索引》によった。

「厥」は、前述のように、《書経》においては、通常、指示詞として用いられ、「其」は、通常、語気詞として用いられているものである。その「厥」が、《詩経》においては、次第に用いられないようになって来ていたということは、「厥」の字形を仮借して用いられていた種類の指示詞そのものが、用いられないようになって来ていたのではなく、その指示詞としての用法のものが、次第に「其」に吸収されるようになって来ていたことを示しているものといえる。〈国風〉における「其」の使用例225例の中、その指示詞としてのものが、121例であって、その過半を占めていることからしても、このことが明らかである。

また、「厥」と「其」とにおける上述のような消長は、漢語発達の上における大きな一つの傾向を示しているものといえる。〈国風〉における「其」の使用例の中、その指示詞としてのものを除けば、その語気詞としてのものは、104例であって、その総字数に対する使用率は、0.97%、すでにその1%に達しないものになっている。〈国風〉は、その大部分のものが、東周以後の作と考えられるのであるが、その表現のしかたの上においては、なお、西周以前のものにならっていることが多分に見られる。しかし、この語気詞としての「其」は、春秋以後、実際には、かなり急速にあまり多く用いられないようになって来ていたのであって、その《論語》の中における使用例数は、62例、その総字数に対する使用率は、0.39%、また、《孟子》においては、使用例数は、33例、その使用率は、0.09%になっている。

「其」は、〈商周書〉においては、「惟」に次いで、きわめて高い使用率のものであって、これらの語気を表わす語を多く用いることが、西周以前の漢語の大きな特徴であったとい

うことができる。漢語は、春秋以後、文末に語気助詞を多く用い、また、語句の間の語法関係を表わす語法成分などをも多く用いるように発達して来ている。しかし、この「其」は、話し手の心情を伝える重要な語気詞の一つとして、春秋以後においても、なお用いられていたものであったということを軽視してはならない。

2 語気詞としての「其」の用法

2・1 副詞・連詞と解されている用法

楊樹達氏は、その《詞詮》において、「其」について、その指示詞としての用法のほかに、四種の副詞、二種の連詞としての意味と用法のあることを説いている。その所説は、ほぼ《経伝釈詞》を承けているものである。楊伯峻氏の《古漢語虚詞》は、《詞詮》の所説を、ほぼそのまま継承しており、現在、中国において多く刊行されている文言虚詞についての解説書も、ほぼその所説によっているものが多い。

「其」について、《詞詮》に説いている副詞・連詞としての六種の用法は、それによって、古代漢語における「其」の大部分の用例は、一応、その文意がわかるようになるようにも思われる。しかし、その承けている《経伝釈詞》における虚詞の解説のしかたについては、よく注意しておかなければならないことが多い。それで、《詞詮》に説かれている六種の用法についても、それらを単に個々のものとはせず、その他の用法との関係を考え、それらの用法を通じて見られる「其」としての用法の特徴をとらえ、更にその「其」の本質をとらえてゆくようにしなければなるまい。

それで、この節においては、まず、《詞詮》に説かれているその六種の用法を紹介しておく。

以下、各用法についての用例は、特に注記のものを除き、いずれも、《経伝釈詞》・《詞詮》が、ともに用例としてあげているものである。

a 副詞 殆也。於擬議不定時用之。

《経伝釈詞》には、「其」の用法の一つとして、「擬議之詞也」と説き、その用例として、次の例(a 1)をあげ、その次に、「猶殆也」と説いて、次の例(a 2)をあげている。《詞詮》は、この二つの用法は、一つの用法としてまとめうるものとしているのである。

(a 1) 知進退存亡，而不失其正者，其唯聖人乎。(周易・乾卦文言伝)

〔進退存亡を知りて、その正を失はざる者は、それただ聖人か。〕

(a 2) 体。王其罔害。(周書・金縢 p. 82)

〔武王が病気になったとき、周公が亀卜の結果が吉であったのを見ていった言葉。〕

加藤常賢氏訳：「よかった。武王にはほとんど害はないだろう。〕

b 時間副詞 将也。

(b 1) 今殷其淪喪。(商書・微子 p. 62)

〔「偽孔伝」：「淪，没也。言殷將没亡。」〕

(b 2) 惟朕小子其新逆。(周書・金縢 p. 84)

〔屈万里氏訳：「我這年青人要親自去迎接他。」(《尚書今註今訳》，1969，台湾商務印書館)
この例の「其」は、いわゆる意志未来を表わしているもの。〕

c 命令副詞 王氏云：其猶尚也，庶幾也。

(c 1) 帝其念哉。(虞夏書・皋陶謨 p. 110)

〔池田末利氏訓読：「帝^ねがはくは念(おも)はんかな。」(《尚書，全釈漢文大系11》，1976，集英社)〕

d 反詰副詞 豈也。其・豈音近，故二字互通。

反詰副詞として用いられている「豈」は、単にその字形を仮借しているものであって、もともと、「其」(k_iəg)が、反詰の文においては、強く k_iər (豈)と発声されるようになって来ていたことによるものである。

(d 1) 我其敢求位。(周書・多士 p. 131)

〔「偽孔伝」：「我其敢求天位乎。」
加藤常賢氏訓読：「我^{それ}敢へて位を求めんや。」〕

e 仮設連詞 若也，如也。

(e 1) 謀之其臧，則具是違，謀之不臧，則具是依。(小雅・小旻195)

〔計画がもしよければ，皆がそれに反対し，計画がよくなければ，皆がそれに従う。〕

f 選択連詞 將也，抑也。(注2)

(f 1) 子以為有王者作，將比今之諸侯而誅之乎，其教之不改而後誅之乎。(孟子・万章下)

〔あなたは，王者が起ったとしたら，今の諸侯を一律にすべて誅すると思われませんか，それとも教えても改めなければ，それから誅するでしょうか。〕

《詞詮》には、「其」について，上記のように，副詞・連詞としての用法のあることを説いている。以下，「其」についての代表的な用法として述べる場合，便宜上，上記の a・b・c・d・e・f の用法と呼ぶことにする。

2・2 語気詞としての「其」の特徴

語気詞としての「其」は，もともと，指示詞としての働きのものから転じて来たものである。もともと，指示詞としてのものが，なにかを具体的に指示するものとしてではなく，

(注2) 《詞詮》(1928初版，1932印行，上海商務印書館；1986，上海古籍出版社)には，この用法のものが，「転接連詞」と記されているのは，なにかの誤りであろう。楊樹達氏の《高等国文法》(1930初版，商務印書館)には，「將」・「抑」などとともに，「選択連詞」の類のものとされている。

なお，《経伝釈詞》には，「其」について，この種の用法は，あげられていない。呉昌瑩の《経詞衍釈》(1873年，何廷謙序，1956，中華書局)に，「其」について，「猶將也，抑也」と解される用法のあることを説いている。《詞詮》は，これを承けているのであろうか。

ある種の語気を表わすものとして用いられ、更に一種の副詞・連詞としての意味・用法をもつようになってきているものもたしかにある。「惟（唯）」が、その代表的な例であって、もともと、近指の指示詞としてのものが、そのすぐ次の語句などを直接的に提起して強調する語気を表わすものとなり、更に、春秋以後、「專辞」・「但辞」などと解される副詞的な意味・用法をもつようになり、また、一面、譲歩連詞としての「雖」の発達を見るようになってきている。「其」についても、やはり、同じように発達して来ていたのであろうかと考えられる。すなわち、もともと、指示詞としてのものが、ある種の語気を表わすのに用いられるようになり、また、その用いられる場合も、次第に幾種か少数の場合にしばられるようになって来ていたもののように考えられる。しかし、この「其」の場合は、春秋以後、その用いられることが、少なくなって来ており、なお、いまだ、副詞・連詞として、その詞性を確定しようにはなっていないもののように考えられ、やはり、なお、語気を表わすものの一種として見るべきもののように考えられる。

「其」は、語気詞として用いられている場合、やはり、ほかの語気調とは違った「其」としての響きがあったものと考えられる。その用いられている場合は、いろいろではあっても、それらの場合を通じて、その「其」の語気としての共通しているものがあつたものであろうと考えられる。この「其」における語気詞としての共通しているものこそ、「其」の本質にもとづくものであり、「其」の語気詞としての特徴ともいえるものであろうと考えられる。

この「其」の語気詞としての特徴をとらえようとする場合、やはり、まず、この「其」がよく用いられている代表的な場合に即して、その場合におけるその語気詞としての働きをよく考察し、また、更に、ほかの代表的な場合と比較しながら、それら幾多の場合に共通しているものをとらえてゆくようにしなければなるまい。

それで、まず、《詞詮》における用法bの「時間副詞」といわれている場合について見てゆけば、その例(b1)に見られるように、その「其」は、ある現象がこれから起るであろう、ということを述べようとする場合に、よく用いられている。もしも、その「其」がなければ、その例(b1)のような文においては、通例、その現象の生起を確定していることとして述べていることになる。それで、例(b1)のような場合においては、その「其」は、なにか確定していないという含みをもっている語気詞として働いているもののように考えられる。

「其」の用法としてあげられているその他の代表的な場合について考えてみても、このなにか確定していないという含みが、この語気詞として、共通して働いているもののように考えられる。

《詞詮》における用法aの「殆」という意味の副詞とされている場合にしても、その例(a1)・(a2)に見られるように、ある人物などについて、話し手が自分で推量した考

えを述べようとする場合などに、よく用いられている。その「其」は、やはり、この不確定という含みをもつ語気詞として働いているもののように考えられる。

また、用法bの「時間副詞」といわれている場合の「其」は、上述のように、いわゆる単純未来のことを述べようとする場合に、よく用いられているのではあるが、その例(b2)について述べておいたように、その「其」は、同時に、また、意志未来のことを述べようとする場合にも、よく用いられている。すなわち、ある事がこれから起るであろう、ということを書けようとするときも、話し手がこれからなにかをすることを希望している、ということを書けようとするときも、古代漢語においては、同一の語気詞によって、そのことが伝えられていたことがわかる。

このように、「其」が、意志未来のことにも用いられていることからすれば、用法cの「命令副詞」といわれている場合も、話し手が、その相手に対して、これからなにかをすることを希望している、ということを書けようとするものなのであるから、その「其」は、「時間副詞」といわれている場合の例(b2)におけるものと同類の語気を表わしているものであったろうと考えられる。

上述のように、《詞詮》に副詞とされているa・b・cの場合を通じて、その「其」は、不確定という含みをもっている語気詞として働いているのであって、その語気詞が、その場合によって、話し手が自分で推量した意見を述べようとしていることを表わすように働き、また、場合によっては、ある現象がこれから起るであろうということ、また、話し手がこれからなにかをすることを希望しているということ、更に、話し手が相手になにかをすることを希望しているということ、これらのことを表わすようにも働いているもののように考えられる。また、このように、不確定という含みを表わすことが、この語気詞として用いられている「其」の全般に通じていいうることのように考えられる。

ある事柄について述べる場合、確定していないという語気を表わすということは、また、一面、話し手がその事柄に幾分疑惑を感じているということでもあり、話し手の疑惑感が表わされているのであるともいうことができる。それで、その不確定の程度が高く、話し手の疑惑感が強い場合には、その「其」は、一種の疑問を表わす語気詞のようにも働くようになるものと考えられる。卜辞の中によく見られる「其雨」というような尋ねかたがその例であって、その「其」は、「加重的表示未来疑感的語気」などとも説かれている(陳夢家：《殷虚卜辞綜述》，1956，科学出版社，p.87)。「其」がその用法dの「反詰副詞」といわれている場合は、この疑問に近いような語気の働きによるものに違いなく、また、その用法eの「仮設連詞」といわれている場合も、更に、その用法fの「選択連詞」といわれている場合も、やはり、この疑惑を含んでいる語気詞としての働きによるものと考えられる。

「其」が、語気詞として表わす不確定感の程度の違いは、もちろん、その程度の高い場合だけに見られるものではない。後述のように、その語気詞として表わしている不確定感

の程度が、かなり低いものになっている用例も見られる。また、裴学海氏は、その《古書虚字集釈》において、楊樹達氏が、「其」について、「殆也」と解しているものを二分して、「其」には、「猶或也」と解される用法と、「猶殆也」と解される用法があるものと説き、その前者の用法について、「疑問之詞」と説明し、その後者の用法については、「疑而有定之詞」と説明している。「其」が、その語気詞として表わしている用法を、その表わしている不確定感の程度によって分類してゆけば、この裴学海氏のような分けかたもできるわけである。

語気詞としての「其」は、上述のように、話し手の不確定感を表わしているものであったと考えられる。その表わしている不確定感は、その場合によって、そのニュアンスの違い、その程度の違いが、いろいろあったものに違いない。しかし、それらの場合を通じて、この不確定感を表わすということが、この「其」の語気詞としての大きな特徴であったものと考えられる。また、「其」が、このように、語気詞として、話し手の不確定感を表わすということは、やはり、「其」が、もともとは、遠指の指示詞としてのものであったことによるものであろうかと考えられる。すなわち、もともとは、近指の指示詞としてのものであった「惟」においては、そのすぐ近くのを提示する強い切迫感があったのであろうかと思われるのであるが、もともと、遠指の指示詞としての「其」においては、そのような切迫感はなく、その遠く遙かなるものを指すということが、その不確定感を表わすようになって来いたのであろうかと考えられる。

2・3 疑問詞などの前後に

《経伝釈詞》には、「其」には、「語助」と解される用法があるものとし、その中に、次のような例をあげている。《詞詮》も、その所説を承けて、「其」には、「句中助詞、無義」という用法があることを説いて、同じ例をあげている。

- (1) 悠悠蒼天，曷其有所。(唐風・鶉羽，121)

〔朱子集伝〕：「悠悠蒼天，何時使我得其所乎。」

- (2) 復自道，何其咎。(周易・小畜初九)

〔復りて道による，何ぞそれ咎あらん。〕

「其」は、次のような疑問詞の後にも、よく用いられている。

- (3) 誰其尸之，有齊季女。(召南・采蘋，15)

〔誰かそれこれを尸(つかど)る，つつしめる末のむすめ。〕

- (4) 夫如是，奚其喪。(論語・憲問)

〔このようなのでありますから，(衛の靈公は，) どうして国を失うことなどありましようや。〕

上の諸例に見られるように、疑問詞の後に用いられている「其」は、やはり、不確定度の高い疑惑を表わす語気のものであったろうと考えられる。すなわち、その前の疑問詞を

強く述べた後に、この疑惑感を表わす語気詞としての「其」が、その疑問詞を助ける余声のように用いられているものであらうと思われる。

「其」は、また、「殆」・「豈」などの後にも用いられている。

- (5) 国不忌君，君不顧親，能無卑乎。殆其失国。(左伝・昭公11年，22・34)

〔「国の人々が君を恐れず，君が肉親を思わないようでは，落ちぶれずにおれましようや。多分，国を失うだろう。〕

- (6) 其然。豈其然乎。(論語，憲問)

〔倉石武四郎氏訳：「そうですか。ほんとうにそうですか。」(《論語，世界文学大系69》1968，筑摩書房)

「皇疏」に、一説として、「其然，是驚其如此。豈其然乎，其不能悉如此也。」とある。「朱注」に、この二句について、「蓋疑之也。」とある。〕

上例(5)・(6)の「殆」・「豈」は、前に2・1において述べたように、ともに、「其」のもっている用法の一種とされているものである。特に、その「反詰副詞」といわれている「豈」は、その際に述べたように、もともと、「其」が、反詰の文において、強く疑惑を表わして発声されたときの仮借字と考えられるものである。それで、例(6)の「豈其」といういいかたは、もちろん、まず強く疑惑をこめて、「豈」と発声してから、更に、疑惑感を表わす「其」を、その余声のようにそえ用いているものに違いない。例(5)の「殆其」についても、同様に、まず強く「殆」と発声してから、更に、不確定を表わす語気として、「其」がそえられているものと考えられる。

この「殆」・「豈」などの後に用いられている場合と、上例(1)~(4)のように、疑問詞の後に用いられている場合とにおいて、それらの「其」の表わす疑惑感・不確定感には、やはり、そのニュアンスの違い、程度の違いがあったものと考えられる。しかし、例(1)~(4)のように、疑問詞の後に用いられている「其」と、例(5)・(6)のように、「殆其」・「豈其」などと連用されている「其」とは、語気詞としては、基本的には、やはり、同一の働きのものであったと考えられる。それで、《経伝釈詞》にならって、例(1)・(2)に見られるような「其」を、特に区別して、単に「無義」の「語助」などとすることはできない。

また、「其」は、次のように、疑問詞や「殆」・「或」などの前にも用いられている。

- (7) 心之憂矣，其誰知之。(魏風・園有桃109)

〔「心の憂ふる，それ誰かこれを知らん。〕

- (8) 人雖欲自絶，其何傷乎日月乎。(論語・子張)

〔「人が自分で(日月と)縁を切ろうとしても，日月になんのいたみをあたえましようや。〕

- (9) 顔氏之子，其殆庶幾乎。(周易・繫辭下伝)

〔「顔氏の子(顔回のこと)，それほとんど庶幾(ちか)からんか。〕

- (10) 賞而去之，其或難焉。(左伝・襄公21年，16・39)

〔「(一方で盗人のような人を)賞しておいて，(他方で盗人を)取り去ろうとしても，恐らく難しい

でしょう。』)

上例(7)における「其誰」は、前例(3)における「誰其」の場合とは反対に、その疑問詞の「誰」を強く言い出す前に、それを引き出すかのように、まず「其」によって疑惑感を表わす語気を強く発しているものといえることができる。例(8)~(10)についても、同様に考えられる。

「其」は、上述のように、「誰」・「何」・「殆」などの前にも、また、後にも用いられている。そのように用いられている「其」は、語法的には、もちろん、必須のものであったものではない。しかし、その「其」が用いられていることによって、その疑惑などが、一段と強く表わされているのである。また、その疑問詞などの前に用いられている方が、その後にも用いられているものよりも、より強くその疑惑などを表わすように述べられているものと考えられる。「誰」について、次の諸例を較べてみても、このことが明らかであろう。

「誰」が主語になっている場合

- (11) 天之所廢，誰能興之。子必不免。(左伝・襄公23年，17・4)

〔齊に亡命していた晋の欒盈が、ひそかにその旧領の曲沃に帰って来たとき、曲沃の大夫の胥午がいった言葉。「天が見捨てた人を、誰が再興させることができますよ。あなたは、きっとのがれられません。』〕

- (12) 既獲姻親，又欲恥之以召寇讎。備之若何。誰其重之。若有其人，恥之可也。若其未有，君亦凶之。(左伝・昭公5年，21・36)

〔晋の公女が、楚に嫁いで来たときに、楚の靈王が、その公女を送って来た人々を処刑しようとした。そのとき、大夫の一人がいった言葉。〕

「姻戚になっておきながら、恥かしくてあだを招こうとなされる。それに対する備えは、いかがなさいますか。誰がその備えの任に重(たえ)られましょうか。もし、その人がおりましたら、恥かしくてもよろしゅうございます。もしも、その人がいないならば、殿もよくお考えください。』)

- (13) 美哉。勤而不徳。非禹，其誰能脩之。(左伝・襄公29，19・19)

〔呉の季札が、魯に来聘したとき、禹の楽である大夏を舞うのを見ていった言葉。〕

「美しい。苦勞していても誇らない。禹でなければ、誰がこの楽をつくりあげることができようか。』

この例においては、この言葉について、例(12)のように、「若有其人，……」などということはない。』

「誰」が述語になっている場合

- (14) 追我者誰也。(孟子・離婁下)

〔鄭の子濯孺子が、追撃されて危くなったとき、その御者に尋ねていった言葉。〕

「我を追ふ者は、誰ぞや。』)

- (15) 夫天未欲平治天下也。如欲平治天下，当今之世，舍我其誰也。(孟子・公孫丑下)

〔孟子が、齊を去る途中で、弟子の充虞にいった言葉。〕

「夫れ天未だ天下を平治するを欲せざるなり。如し天下を平治するを欲せば、今の世に当りて、我を舍(お)きて、それ誰ぞや。』)

また、「其何」は、例(8)に見られるように、その疑問を強く表わすことからして、話し手がそのことを否定していることを表わしていることが多い。それに対して、「何其」は、次例に見られるように、その疑問を表わすことから、話し手がそのことを驚歎していることを表わすような場合にも、よく用いられている。それで、「何其」は、「歎異之詞」とも説かれている(《助字弁略 vol.2》)。そのような用例は、「其何」などには見られない。「其何」の方が、より強く疑問を表わしていることによるものと考えられる。

- (16) 大宰問於子貢曰、「夫子聖人與。何其多能也。(論語・子罕)

〔大宰が子貢に尋ねた、「先生は聖人なのでしょうか。なんといろいろなことがおできになるのでしょうか。〕

次に、「其」は、また、次のように、「若之何」などの連語の前後にも用いられている。この場合においても、やはり、その前に用いられている方が、よく強く疑問を表わしているものと考えられる。

- (17) 以是藐諸孤辱在大夫，其若之何。(左伝・僖公9年，5・50)

〔晋の獻公は、大夫の荀息を、その公子の奚齊の守り役にしていたが、病が重くなったときに、荀息を呼んでいった言葉。〕

「この幼弱な子をあなたにご委託しておりますが、どのようになされますか。〕

- (18) 子産有辞，諸侯頼之。若之何其积辞也。(左伝・襄公31年，19・52)

〔子産が鄭伯につきそって晋に行き、宿舎にあてられた客館の塀をこわして、その車馬を入れさせた。そのことを晋の人に非難されたときに、子産は、立派に応待の言葉を述べた。そのことについて、晋の叔向がいった言葉。〕

「子産が応待の言葉を立派に述べたので、諸侯がそのお蔭をうけた。どうして応待の言葉を捨てられようか。〕

2・3・付1 疑問の文末に

「其」は、前述のように、疑問詞や疑問の連語の前後に用いられて、それぞれ、その疑問詞や連語の表わす疑問を助け強める働きをしている。その「其」は、また、次のように、疑問の文末にも用いられている。いずれも、疑問の連語や疑問詞が、その前に用いられているのであるが、この「其」は、やはり、疑問の文末に用いられる語気助詞として働いているもののように考えられる。

- (1) 夜如何其。夜未央。(小雅・庭燎，182)

〔夜はいかが。夜はいまだつきず(時刻の早いこと)〕

この例の「其」につき、《釈文》に、「音基，辞也」とある。「基」は、「箕」と同音。〕

- (2) 彼人是哉。子曰何其。(魏風・園有桃，109)

〔あの人たちは、正しいのだ。そなたは、なにをいっているのだ。〕

この例の「其」についても、《釈文》に、「音基」とある。

屈万里氏の《詩経詮釈》(1983，聯経出版事業公司)に、この例につき、「何其，猶今日之什麼」

と注しており、「何其」が一語になっているもののように見ていることは、取ることができない。
上例(1)の詩句の中の「其」については、屈万里氏も「音基、語詞」と注している。]

(3) 有頰者弁，実維何期。(小雅・頰弁，217)

〔げに高々と戴ける皮の冠，これは維(こ)れなに。〕

《釈文》に、この例の「期」につき、「本亦作其，音基，辞也。王如字。」とある。「期」・「其」は、《広韻》には、同音のもの。]

「其」が、上例のように、疑問の文末に用いられていることは、きわめて少なく、《詩経》を通じて、上記の三例を見るだけである。また、上例について注記しておいたように、《釈文》には、その「其」について、いずれも「基」と音注されている。「基」は、「箕」と同音のものである。このことは、きわめて注意しておかなければならないことである。

「其」は、最初1において述べたように、もともと、「箕」の原字の字形を仮借したものであって、それで、もともと、「箕」(kiɔg)の音であったものと考えられる。しかし、後漢の頃には、すでに、その声母が濁音gのものになって来ていたように考えられる。《広韻》の中に、「不其」という邑名の場合、漢の「酈食其」という人名の場合につき、特に「箕」と同音のものとされているのは、その声母が、もともとは、清音kのものであったことの名残りともいうことができる。

《釈文》の中には、「其」について音注されていないのが通例である。それは、通常の指示詞・語気詞として用いられている「其」は、特に音注する必要のないものであり、その声母は濁音gのものであるということは、六朝音注家の間においては、すでに確定した定説になっていたのである。その《釈文》において、上記《詩経》の三例における「其」について、特に、「基」と音注していることは、それらの「其」は、特にその声母清音kのものに、「其」のもともとの古音に読むことを求めているものということができる。

中国において、《詩経》は、古くから誦読によって伝承されて来ていたもののように考えられる。その《詩経》の中の「其」は、もともと、もちろん、その声母清音kのものに読まれていたものと考えられる。この《詩経》の「其」の中においても、上記の三例のように、疑問の文末にその語気助詞として用いられていることは、きわめて少ないことである。そのように、きわめて少ない特異なものであったために、ほかの指示詞や語気詞としての「其」が、その声母が濁音gのものによってゆく過程においても、その特異なものとして、なお、その古来の読音のままに誦読するように伝承されて来ていたのであろうと考えられる。

《釈文》の音注は、この古来の伝承をよく伝えているもののように考えられる。上例(3)について注記しておいた《釈文》の中に見られるように、その「王如字」とあるのは、王氏は、その本文の「期」を、その声母濁音gのものに読んでいたということを一説としてあげているものである。そのような新しい読み方も、なお、一部にあったものと思われる。しかし、上例(1)・(2)の「其」については、なんらの異説もあげられていない。この古来の

伝承は、六朝音注家の間に、一般によく守られていたもののように考えられる。

次に、上例(3)に見られるように、この種の文末の「其」が、「何期」と表記されているテキストもあった。また、「誰居」・「何居」などと表記されているものも、《左伝》・《礼記》などの中に見られるが、その例は、やはり、きわめて少ない。

(4) 国有人焉。誰居。其孟椒乎。(左伝・襄公23年, 17・17)

〔斉に亡命した臧孫紇に対して、うまい罪名がつけられずにいたときに、孟椒がうまい罪名を考え出した。斉でその罪名を聞いて、臧孫紇がいった言葉。〕

「魯の国にも人物がいる。誰かしら。おそらくは孟椒であろうか。」

《釈文》に、この例の「居」につき、「音基」とある。また、「杜注」に、「居、猶與也」とある。

なお、《左伝》〈成公2年〉(12・31)にも、「誰居」という例が見られ、その《釈文》にも、「音基、語辭也」とある。〕

(5) 孔子曰、三日齋、一日用之、猶恐不敬。二日伐鼓、何居。(礼記・郊特性)

〔「孔子がいわれた、祭りの前には、三日間齋戒して、その次の日に祭りをを行うのであるが、それでも、なお、恭敬が足りないことを恐れる。(それなのに、その三日の中、)二日も鼓を打って楽しむとは、なんということか。〕

「鄭注」に、「居、読為姫、語之助也。何居、怪之也」とある。《釈文》にも、「音姫」とある。〕

上例(4)・(5)の「誰居」・「何居」について、《釈文》には、「基」・「姫」と音注しており、例(5)の「鄭注」にも、「読為姫」とある。「姫」は、「基」・「箕」と同音のものである。このように音注されているのは、やはり、古くから伝承されて来た読音を伝えているものと考えられる。

「誰其」という尋ね方も、西周にその用例が見られない。しかし、例(4)の「誰居」という尋ね方は、やはり、西周において行われていたもの名残りであろうと考えられる。《左伝》の中には、文末に、「誰也」といっている尋ね方も見られ(成公9年, 12・70)、また、《国語》には、「其誰乎」といっている例なども見られる(楚語下, 国学基本叢書本 p.211)。それぞれ、その尋ね方が違っているわけである。「也」は、もともと近指の指示詞としての「惟」から発達して来たと考えられるもので、その前の語句などを強く指示する働きのものである。それで、「誰也」は「誰乎」よりも、より強い尋ね方であったということが出来る。また、この例について注記しておいたように、「杜注」には、この「居」について、「猶與也」と述べている。「與」は、「語不定之辭」などとも説かれているもので(論語・学而第十章・皇疏)、「乎」に較べて、おだやかなひかえめの尋ね方に用いられるものである。この例(4)における「誰居」は、それらに較べて、文語がかった重々しいような尋ね方のものであったろうかと考えられる。

また、例(5)の「何居」は、前例(2)の《詩経》〈魏風〉の中に用いられている「何其」と、漢字の表記のしかたが違ってはいるが、同音の同語として用いられて来ていたものと考えられる。それで、この「何居」という尋ね方も、やはり、文語がかった重々しい言い方のものであったろうと考えられる。

疑問の文末に用いられている「其」、および、《左伝》・《礼記》などに見られる「誰居」・「何居」については、上述のように見るべきものであろうと考える。しかし、《礼記》〈檀弓〉の中にも、「何居」という尋ね方が見られるのであるが、その「鄭注」に、きわめて問題になることがある。

(6) 仲子舎其孫，而立其子。檀弓曰，「何居。我未之前聞也。」(礼記・檀弓上)

〔魯の仲子が、(その適子がなくなったとき、)その適孫を立てずに、その庶子を跡目に立てた。檀弓がいった、「なんということだ。私はこんなことを前に聞いたことがない。」〕

《釈文》に、「音姫，下同。語助」とある。この節の後の節にも、魯の季武子が、「何居」といっている例がある。「下同」は、それを指す。

なお、この例の下文に、檀弓が子服伯子のところに行つて尋ねたときには、「仲子舎其孫，而立其子，何也」といっている。〕

この例について「鄭注」に、次のように述べている。

居，讀如姬姓之姫。齊魯之間語助也。

檀弓は、戦国初期の魯の人である。この「鄭注」によれば、例(6)の「何居」は、檀弓が魯の方言で話したということになる。それでは、前例(5)の〈郊特性〉の中の孔子の言葉も、魯の方言ということになるのか。なぜに、〈郊特性〉についての「鄭注」には、この「齊魯之間」のことが述べられていないのか。また、この例(5)・(6)についての《釈文》には、ともに「姫」と音注されていて、異説もなんらあげられていない。《釈文》は、前述のように、古くから伝承されて来た読音を伝えようとしているものであって、方言音を伝えようとしているものではない。それで、この例(6)についての「鄭注」は、恐らくは、鄭玄の手になるものではなく、あやまって書き加えられたものであろうかと考えられる。なお、前例(2)の〈魏風〉の中の「何其」は、前述のように、この《礼記》の中の「何居」と同音の同語と考えられるものであるが、それについての「鄭箋」の中にも、この「齊魯之間」のようなことは、なんら述べられていない。

また、《書経》の中に、この種の文末の「其」は、次の1例だけである。その「其」についても、例(6)についての「鄭注」と同じようなことが述べられている。

(7) 予顛隤，若之何其。(商書・微子 p. 63)

〔わが殷の国は、ひっくりかえる。どうしましょうか。〕

この例文は、《史記》〈宋微子世家〉に、そのまま引用されている。その「集解」の中に、次のように述べられている。

鄭玄曰，其，語助也。齊魯之間，声如姫。記曰，何居。

例(6)の檀弓のいっている「何居」が、かりに魯の方言であったとしても、殷末に微子のいった「若之何其」の「其」を、戦国初め、いや、後漢の頃の齊魯の間の方言音で読むということは、古く伝承されて来ていた古典の読み方として、私には納得できない。この「若之何其」の「其」は、上例(1)の〈小雅〉の中の「夜如何其」の「其」と同じ類のものと思

るべきものと考えられる。その例(1)についての「鄭箋」の中にも、魯語のことなどは、なんら述べられていない。

なお、「居」は、《広韻》には、「上平」「魚」韻の中にあげられているのであるが、《広韻》の中には、その「上平」「之」韻の中に、「箕」・「姫」・「基」と同音のものとして、特に、また、「居」の字をあげており、それについては、「語助、見札」と解説している。やはり、古来伝承されて来ている特異な読音のあることを重視しているものといえることができる。

「其」が、疑問の文末に語気助詞として用いられている例は、春秋以後には見られない。また、「何居」・「誰居」と表記されているものも、その例は、きわめて少ない。同じく指示詞から発達して来た語気詞としての「惟」においては、春秋以後、文末の語気助詞「也」としての大きな発達が見られるのであるが、「其」は、文末の語気助詞としても、広く用いられるようなことのないままに衰滅してしまっているといえることができる。

2・3・付2 否定詞の前後に

「其」は、前述のように、語気詞として不確定なことを表わすものであり、その不確定度が高い場合には、疑問の語気を表わすようになっていく。この疑問の語気を表わすのは、疑問詞の前後などに用いて、その疑問詞を助け強めるように用いられていることが多い。この疑問詞を助け強めるということは、それが更に強く働けば、否定詞にそえ用いて、その否定の語気を強めるようにもなっていたもののように考えられる。

《書経》の中にも、否定詞の後に「其」が用いられていることが若干見られる。次例における「其」は、いずれも、その前の否定詞を助けて、その否定の語気を強めているものと考えられる。

(1) 不其或稽，自怒曷瘳。(商書・盤庚 p. 54)

〔加藤常賢氏訓読：「其（これ）を稽（かんが）ふる或（あ）らざれば、自ら怒ること曷（なん）ぞ瘳（や）まん」〕

《経伝釈詞》に、この例の「其」につき、「猶之也」と解されるものとしており、《詞詮》も、それによって、「指示代名詞」としているのは、取ることができない。

なお、楊筠如氏の《尚書覈詁》には、「不其、古成語。……不其猶言其不也」と説き、次の例(2)・(5)・(6)の「不其」をも、その例としてあげている。

(2) 我不敢知，曰不其延。(周書・召誥 p. 118)

〔「孔疏」に、「其末亦我不敢独知，亦王所知，曰殷紂不其長久。」とある。〕

《経伝釈詞》には、以下例(6)までの「其」を、ともに「語助也」と解されるものとしており、《詞詮》も、「句中助詞、無義」としている。

(3) 無若火始緘緘，厥攸灼，敝弗其絶。(周書・洛誥 p. 123)

〔池田末利氏訓読：「火の始め緘緘たるも、厥の灼（や）く攸（ところ）、敝（つ）ぎて其（もつ）て絶たざるが若くすること無かれ。」〕

「其」を「もつて」と読んでいることは、取ることができない。

- (4) 汝惟小子，未其有若汝封之心。(周書・康誥 p. 97)

〔周公が成王に代って康叔(名は封)にいった言葉。

「偽孔伝」に、「他人未其有若汝封之心，言汝心最善。」とある。〕

上の諸例に見られるような「其」の用法は、春秋以後においても、《左伝》・《国語》の中に、なお、二三の例が見られるが、戦国以後には、もはや、見られないようになっている。

- (5) 多而驟立，不其集亡。(国語・晋語一)

〔(国が乱れて、) 事変が多く、しばしば君主が代って立つだろうが、滅亡には集(いた)らない。〕

- (6) 此一役也，秦可以覇。納而不定，廢而不立，以德為怨。秦不其然。(左伝・僖公15年，5・88)

〔晋の恵公が秦に捕えられていたとき、晋の呂甥が、それを帰国させてもらうために秦に行つて、晋の国内の様子を聞かれたときに、晋の国の上位の人たちの言っていることとして、秦伯に答えていった言葉。

「このたびの戦で、秦は覇者になることができる。(恵公を) 晋に入れてやりながら、その位を安定させてやらず、君位から引きおろしておいて、君に立ててやらないのは、(前にしてやった) 恩徳を恨みにかえるものです。秦はそうはいたしません。」

「林注」に、「秦穆公之志，必不肯如此」と注し、沈玉成氏が、「秦国会是這樣的吧」と訳しているのは(《左伝訳文》1981, 中華書局)、呂甥の「不其」が強い否定であることを訳出しようとしているものといふことができる。

なお、この例と同じように、「秦不其然」といっている例が、〈襄公26年〉(18・10)にも見られる。〕

上例(5)・(6)における「不其」という否定のしかたは、西周以前において行われていた言いかたの名残りであろうと考えられる。「其」は、前に、2・3において述べたように、疑問詞などについては、「何其」という言いかたとともに、それよりも、より強い「其何」という言いかたも行われていた。してみれば、この否定の場合にも、この「不其」という言いかたとともに、それよりも、より強い「其不」という否定のしかたも、西周以前にはあったのではなからうかとも考えられる。《書経》の中には、そのような用例は見られない。しかし、春秋以後のものに、あるいは、その名残りかとも見られるようなものがある。

それは、上例(6)の《左伝》の中に見られる晋の呂甥が秦伯に答えた「秦不其然」という言葉が、《国語》〈晋語三〉には、「君其不然」となっているということである。もしも、この《国語》における書きあらわし方が、西周以前に実際には行われていた言いかたの名残りであるとすれば、その呂甥の否定のしかたは、《左伝》に見られるものよりも、より強い否定のしかたのものとなる。しかし、そのような否定のしかたであったとしても、《左伝》と全く違っているというわけではない。

しかし、もし、この《国語》の「君其不然」という書きかたが、西周以前の否定のしかたにならったやや文語がかったようなものでないとするれば、春秋以後におけるより口語的な言いかたとしては、その文末に「乎」を用いることができるものとなる。そうすれば、その否定のしかたは、この場合、《礼記》〈檀弓上〉に見える曾子の「其不然乎」という否

定のしかたのものとなる。これは、「恐怕不是這樣吧」などと訳されているもので(王夢鷗：
《礼記今註今訳》1972, 台湾商務印書館), その「其」は、「殆」というに近いような不確定度を
表わすものとなり、《左伝》に見られる強い否定とは、全く違うものとなる。

楊伯峻氏は、その《春秋左伝注》(1981, 中華書局)において、この《左伝》の「秦不其然」
について、次のように注している。

晋語三作「君其不然」, 與襄26年伝「秦其不然」・礼記檀弓上「其不然乎」句語同; 此
作「秦不其然」, 蓋古代語法之遺存者。(襄公26年には、例(6)について注記しておいたように、
「秦不其然」となっている。楊氏の上文の引用は、なにかの間違いであろう。)

この楊伯峻氏の注記は、《左伝》の「不其然」は、古代語法の名残りで、〈晋語〉の「其
不然」・〈檀弓〉の「其不然乎」と同じことを言っているのである、と述べているだけであっ
て、「其」の語気詞としての働きが、よくとらえられていないものといわなければならない。
〈晋語〉の「其不然」を、どうとらえるかということについては、なお問題があるとして
も、《左伝》における「不其然」は、〈檀弓〉における「其不然乎」とは、話し手の語気が
全く異なっているものであるということを軽視してはならない。

次に、「不」の次に「其」が用いられている用例の中には、次のように、単にその否定が
強められているとはいえないものもある。

(7) 鬼猶求食，若敖氏之鬼，不其餒而。(左伝・宣公4年，10・27)

〔「死んで鬼となっても、なお食物をほしがるとしたら、若敖氏の鬼たちは、(子孫が絶えて祭りをし
なくなるから、) 餓えないことがあろうか。〕

「会箋」に、「不其，豈不也。餒，餓也。言不祀也。」あり、「杜注」にも、「而，語助，言必餒也。」
とある。

楊伯峻氏が、この例につき、「不其餒而，猶言不將饑餓乎」と注し、沈玉成氏が、「不是要挨餓了
嗎」と訳しているのは、取ることができない。〕

(8) 才難。不其然乎。(論語・泰伯)

〔「朱注」に、「才難，蓋古語，而孔子然之也。」とある。また、「集解」に、「孔注」として、「才難
得，豈不然乎」とあり、「皇疏」にも、「良才之難得，不其如此乎」とある。〕

上例(7)・(8)における「其」は、《詞詮》には、「反詰副詞」といわれているものであって、
多く述語動詞の前に用いられて、話し手の気持ちを反語的に強く表わす働きをしているも
のである。その述語動詞が「不」で否定されている場合、この「其」は、「不其」とも、ま
た、それよりも、より強く「其不」とも用いられていたものであろうと考えられる。《書経》
の中には、その用例は、ともに見られないが、春秋以後、多く用いられるようになってい
る「豈不」は、その「其不」を吸収したものであろうと考えられる。「豈」は、「其」のよ
り強いものとして発達して来たもので、《書経》の中には、一例しか用いられていないの
であるが、春秋以後、ますます多く用いられるように発達して、「其」をその中に吸収してし
まうようになっているものである。この「豈不」に対して、上例(7)・(8)における「不其」

という言いかたは、西周には行われていたであろうと思われる言いかたの名残りが、わずかに残っていたものであろうと考えられる。

なお、《論語》の中には、この反語の「其」は、上例(8)のほか、なお3例用いられていたのであるが、《孟子》の中には、1例も見られないようになっている。「豈」に吸収されてしまったものということができる。

2・4 「其必」・「必」と訳されていることについて

「其」は、前述のように、語気詞として不確定なことを表わすものである。また、その不確定の程度は、その場合によって、いろいろ違いがあったということができる。「其」が文中において、「其殆」・「其或」・「豈其」などと連用されている場合は、その字面の上からしても、「豈其」が、もっとも、その程度が高いものであったことを知ることができる。それでは、その不確定の程度が、かなり低いような場合は、どうであったであろうか。そのような場合は、實際上、比較的少なかったように思われる。しかし、《左伝》などの中には、次例のように、「其必」と連用されている例が見られ、また、《書経》の「孔疏」などの中には、その本文の「其」が「其必」と訳出されていることが見られる。このように、「其」と「必」とを連用することが、字面の上からしても、その不確定の程度の低いことを表わすものであったと考えられる。

(1) 衛君其必帰乎。(左伝・襄公14年、15・54)

〔衛の献公が齊に亡命していたとき、衛の国に弔問に行った魯の厚成叔が、帰国してから、臧武仲にいった言葉。〕

「衛君は、たぶんきつと国に帰えられるでしょう。」

その臧武仲が、齊の国に献公を見舞に行つて、献公と面談した後で、その従者にいった言葉は、衛侯其不得入矣。

(衛侯は、おそらくもう帰国できますまい。)

献公の弟の子展と子鮮とが、このことを聞いて、臧武仲と会つて、いろいろ話したところ、臧武仲が喜んで、その従者にいった言葉は、

衛君必入。

(衛君は、きっと帰国する。)

(2) 今汝其曰、夏罪其如台。(商書・湯誓 p. 45)

〔孔疏〕：「今汝衆人、其必言曰、夏王之罪、其如我所言。」

この「孔疏」は、本文の「其曰」の「其」は、この場合、不確定度の低いものと考え、それで、「其必言曰」(たぶんきつとというであろう)と訳したものであろうと考えられる。)

「必」は、「定辞」(字彙)・「決定之辞」(助字弁略 vol. 5)などと説かれているものであって、確定していることをいうものである。それで、不確定なことの語気を表わす「其」とは、古くから明白に区別して使用されていたものである。上例(1)について注記しておいたように、衛君の帰国についての予想が二転三転していることが、その「其」と「必」との用い方によって示されているともいうことができる。また、次の例についても注記してお

たように、その「其」と「必」とは、その話し手においては、入れかえて用いることができなかつたものであるということが出来る。

(3) 我実使狄，狄其怨我。(左伝・僖公24年，6・53)

〔周の襄王は、狄の君の娘を迎えて王后としたが、その後、その王后の位を取り消した。その時に、大夫の頰叔と桃子とがいった言葉。〕

「われわれが、(狄の娘を迎えるのに、)狄に使者としていったのであるから、狄は、おそらく、われわれを怨むであろう。」

なお、初め狄の娘を迎え入れようとしたときに、大夫の富辰が、それをやめさせようとして諫めた時には、その理由として、「狄必為患」といっている。その「必」は、確定している必然のこととして述べているのである。〕

上述のように、「其」と「必」とは、明白に区別して用いられていたものであった。しかし、その「其」の語気詞として表わしている不確定の程度はいろいろであり、また、古典の中において、その不確定度がかなり低いと思われる「其」が用いられているものについても、それを「其必」として訳出することも次第に行われなくなつて来ているのであるから、「其」の語気詞としての特徴をよく考えて、その判断をあやまらないようにしなければならない。事実、《論語》などについての古来の注解書の中にも、その原文の「其」を「必」と解しているように思われるものがよく見られる。

(4) 子曰、吾於人也，誰毀誰譽。如有所譽者，其有所試矣。(論語・衛霊公)

〔先生がいわれた。わたしは人に対して、そしめることも誉めることもしない。もし、誉めることがある場合は、たいていもうたしかめていることがあります。〕

「朱注」に、この例の後半について、「或有所譽者，則必嘗有以試之，而知其將然矣」と述べており、「皇疏」にも、「……必先試験其徳、而後乃譽之耳」と述べている。

「皇疏」や「朱注」が、原文の「其」を「必」のように訳しているのは、孔子という人は、たしかめてもない人を絶対に誉めたりするはなかつた、ということを説きたかつたものように考えられる。「其」の語気詞としての働きが、よくとらえられないようになって来ていることによるものと考えられる。しかし、「皇疏」の中に、一説として、「……、其必以事試之也」と説かれていることを見のがしてはならない。

なお、現在、中国において、楊伯峻氏の《論語訳注》(1958、古籍出版社)などにおいても、この例の「其」が、「必然」と訳されている。〕

(5) 其事也。如有政，雖不吾以，吾其與聞之。(論語・子路)

〔季氏のところに仕えていた冉有が帰つて来たとき、孔子が、どうして遅かつたのだ、と尋ねたところ、「有政」(政治のことがありました)と答えたのに対して孔子のいった言葉。〕

「おうかた季氏の私事であろう。もし国の政治のことがあるならば、わたしを現在任用してなくても、わたしはおそらくその相談にあずかるだろう。」

「朱注」に、「此必季氏之家事耳。若是国政，我嘗為大夫，雖不見用，猶當與聞」と述べている。また、「集解」にも、馬融の解として、この例の末二句について、「雖不見任用，必當與聞也」(阮元校勘本には文末に「也」の字がない。今「皇本」によつた)と述べている。

原文の末句について、馬融は、「必」・「当」・「也」という語を用いて、そのことの確実なこと当然なことを強調している。いずれも、原文にはない語である。それで、その所説は、馬融が推測した自分の意見を述べているものであつて、原文の原意をよく伝えているものとはいふことができ

ない。

この原文の末句について、許世瑛氏も、「……、我必然會與聞的」と訳している（〈論語中「其」字用法探究〉《孔孟學報第六期（1963）》。）

上例(5)の中の「其事也」は、その文末に、「也」が用いられている。「也」は、もともと、近指の指示詞としての「惟」から発達して来たもので、その主題になっていることについて、はっきりと解明するような場合に、よく用いられているものである。それで、「其」が用いられている文末に、この「也」が用いられている場合は、その「其」の語気詞として表わしている不確定度は、通例、かなり低くなっているものと考えられる。また、そのような例は、比較的少ないものであって、《論語》の中においても、その適例と見られるものは、この例(5)のほか、次の1例を見るだけである。

(6) 樂其可知也。(論語・八佾)

〔孔子が、魯の大師（樂官の長）に話した言葉。〕

この例につき、楊伯峻氏は、「音楽、那是可以曉得的」と訳し、許世瑛氏は、この例の「其」を、「相當於白話的繫詞“是”字」と説いている。ともに取ることはできない。〕

上例における「其」についても、注記の中にあげておいたような誤解が多く行われている。しかし、このような文型における「其」についても、それが用いられていないものと比較して考察すれば、その「其」の語気詞としての働きが、容易に明らかになることと思われる。《左伝》の中から、その例をあげておくことにする。

(7) 彼良医也。(成公10年、12・75)

〔沈玉成氏訳：「他是個好医生。」〕

(8) 彼其子重也。(成公16年、13・46)

〔沈玉成氏訳：「他恐怕就是子重吧。」〕

この沈氏の訳は、古人の「其必」の訳に近いものであろう。〕

(9) 亡鄧国者，必此人也。(莊公6年，3・14)

〔沈玉成氏訳：「滅亡鄧国的，必定是這個人。」〕

なお、《左伝》の「杜注」の中に、「其」が「必」と解されているような例が見られる。その「杜注」が、また、いろいろ誤解を引き起している。

(10) 其然，将具敝車而行。(襄公23年，17・11)

〔魯の季武子が、その後継ぎに、年下の悼子を立てようとして、家臣の申豊に尋ねたときに、申豊がいった言葉。〕

「もしそうなされるなら、(私は)自分のぼろ車に家財をつんで、たち去ります。」

「杜注」に、「其然，猶必爾也」と述べている。

この「杜注」の中の「必爾」ということは、魏晉の頃の口語であったと考えられる。江藍生氏の《魏晉南北朝小説詞語滙釈》(1988, 語文出版社)に、「必」について、「“必”有“若”義」と説き、《搜神記》(vol. 1)の中から、「必爾者，……」という例をあげ、「猶言“如果這樣的話”」と説いている。

「必」が、このように、「若」のように用いられるのは、もともと、確定的であることを表わす「必」を、強調的に用いることによって、かえって、それが仮定的な発話であることを表わすよう

にもなっていたことによるもので、「必爾」は、当時、よく用いられていたいいかたであったろうと考えられる。このことは、「誠」が、真実であることをいうことからして、それを強調的に用いて、かえて、仮定の発話であることを表わすのにも用いられているのと、同じような表現のしかたであるということが出来る。

なお、《経伝釈詞》には、この例の「其」を、「猶若也」と解される用法のものとしており、《詞詮》も、その説によっている。もちろん、この例の文意の解しかたが、「杜注」と違ってはいるわけではない。]

上例について、「杜注」に、「其然、猶必爾也」と説いているのは、注記しておいたように、原文の「其然」は、仮定的な発言であることを述べているものであって、その「必」は、その第一義である確定的なことを表わす意味のものとして用いられているのではない。しかし、上述のように、「其」が「必」のように解されることがよくなされていたためであろうか、この「杜注」を根拠として、「其」には、確定的なことを表わす「必」のような用法もあるとすることも行われて来ていた。

例えば、劉宝楠の《論語正義》には、前に2・3に、その例(6)としてあげた《論語》中の「其然、豈其然乎」につき、その「其然」を、この「杜注」によって解している。また、裴学海氏の《古書虚字集釈》に、「其」には「猶必也」と解される用法があるとし、上例(5)の「其事也」の「其」を「必」と解しているのも、この「杜注」を、その大きな一つの根拠としている。いずれも、この「杜注」を大きく誤解しているものといわなければならない。

2・5 性状を表わす語の前後に

《経伝釈詞》に、「其」には、「状事之詞也」と解せられる用法があるととして、「其」が性状を表わす語の前に用いられている場合と、その後用いられている場合とに分けて、次のように、各3例あげている。

a型 先言其事而後言其状者

(a 1) 擊鼓其鏜，踴躍用兵。(邶風・擊鼓，31)

〔鼓を撃つことそれ鏜たり，踴躍して兵を用ふ。〕

〔毛伝〕に、「鏜然，擊鼓声也」とある。〕

(a 2) 北風其涼，雨雪其雰。(邶風・北風，41)

〔北風それ涼く，雪ふることそれ雰(さかん)なり。〕

〔毛伝〕に、「雰，盛貌」とある。〕

(a 3) 我来自東，零雨其濛。(豳風・東山，156)

〔われ東より来れば，雨零(お)つることそれ濛たり。〕

〔孔疏〕に、「我来自東方時，道上乃遇零落之雨，其濛濛然。」とある。屈万里氏の《詩経詮釈》には、「濛，細雨貌。其濛，猶濛然也。」とある。〕

b型 先言其状而後言其事者

(b 1) 桃之夭夭，灼灼其華。(周南・桃夭，6)

〔「桃の夭夭たる，灼灼たりその華。」〕

この例の「其」は、「状事之詞」とはいうことのできないものである。例句は、「桃夭」篇の首章の第一句・第二句であるが、その第三章の第一句・第二句は、「桃之夭夭，其葉蓁蓁」となっていることからしても、このことが明らかであろう。〕

(b 2) 殷其雷，在南山之陽。(召南・殷其雷，19)

〔「毛伝」に、「殷，雷声也」とあり、「孔疏」に、「殷殷然雷声，在南山之陽」とある。〕

(b 3) 緜兮綌兮，淒其以風。(邶風・緑衣，27)

〔「葛のきものに，つめたく風吹く。」〕

屈万里氏の《詩経詮釈》に、「淒，寒風貌，淒其，猶淒然也」とある。なお，緜は目のつまった葛布，綌は目のあらい葛布。〕

《経伝釈詞》の中において、「状事之詞」として，その「常語」と説かれているものは，「然」である。《経伝釈詞》が，「其」について，「状事之詞」としての用法のあることを説いているのは，この「然」に近いところがあると考えたのであろうかとも思われる。しかし，「其」は，「然」とは異なって，性状を表わす語の前にも用いられているものである。このことは，よく考えておかなければならないことのように思われる。

「其」が，性状を表わす語の後に用いられているものは，いかにも「然」とおきかえていことができるようにも思われる。「然」(nian)は，その声母 n 系の中指の指示詞であって，性状を表わす語の後に用いて，「そのようである」ということを表わし，安定した二音節語を作るのによく用いられているものである。《詞詮》には，「語末助詞」の一種で，「助形容詞或副詞為其語尾」と説いている。上記の例 (b 3) の「淒其」について注記しておいたように，屈万里氏が「淒然」と解しているのも，その「其」を「然」と同じ接尾語的なもののように見ていたものと考えられる。

しかし，この性状を表わす語の後に用いられている「其」は，「然」とは大きく異なるところがあるように思われる。上記の例 (b 2) の「殷其雷」は，注記しておいたように，「孔疏」には，「殷殷然雷声」と解されている。この「孔疏」は，「鄭箋」を承けているものであり，「朱伝」にも，同様に「殷殷然雷声」と解されている。すなわち，「殷其」は，単に「殷然」と訳されるものではなく，その雷鳴の程度は，より高く強く，「殷殷」または「殷殷然」と訳されるものとして伝承されて来ていたもののように考えられる。例 (b 3) の「淒其」についても同様に，単に「淒然」と訳されるものではなく，「淒淒」・「淒淒然」と訳されるものであつたろうと考えられる。〈小雅・四月〉(204) に，「秋日淒淒」という詩句が見られ，その「孔疏」に，「淒淒然」と訳している。それで，これら性状を表わす語の後に用いられている「其」は，単に「そのようである」という程度のことを表わす接尾語的なものではなく，その前の「殷」・「淒」を強く述べて，その後，その程度の高いことを表わす余声のように，その「其」が用いられているもののように考えられる。

次の例に見られるような「若是其……」という句型の中に用いられている「其」も、やはり、その「若是」を強く述べた後に、更に、その程度の高いことを表わすものとして用いられているものと考えられる。(注3)。

- (1) 言不可若是其幾也。(論語・子路)

〔ことばというものは、そんなにもあてにすることはできません。〕

- (2) 管仲得君，如彼其專也。(孟子・公孫丑上)

〔管仲は、その君の信任をえていたことは、あんなにも独専的であった。〕

上例におけるような「其」は、語法的に必須のものではない。次のような例と較べてみても、この「其」の働きがよくとらえられるであろう。

- (3) 余髮如此種種，余奚能為。(左伝・昭公3年，20・61)

〔わたしの髪は、(年老いて、)このように薄くなりました。わたしにながができません。〕

- (4) 夫公明高以孝子之心為不若是恕。(孟子・万章上)

〔あの公明高は、孝子の心というものは、そのように割りきったものではないと考えていました。〕

「其」は、上述のように、性状を表わす語の後に用いられている場合、その性状の程度の高いことを表わす働きをしているものといえることができる。それでは、上記の例(a1)・(a2)・(a3)のように、その性状を表わす語の前に用いられている場合は、どうであろうか。この場合においても、その例(a3)について注記しておいたように、その「其濛濛」は、その「孔疏」に、「其濛濛然」と訳されていたものであり、その次の語の表わしている性状の程度は、やはり、高かったものにちがいない。しかも、「其」が、性状を表わす語の後に用いられている場合よりも、その性状の程度は、より高く強いものであったように考えられる。

- (5) 坎其擊鼓(kuag)，宛丘之下(hāg)。(陳風・宛丘，136)

〔坎としてそれ鼓を撃つ、宛丘のもとに。〕

〔毛伝に、「坎坎，擊鼓声。」とある。また、「四方高，中央下，曰宛丘。」とある。〕

- (6) 擊鼓其鏜(t'aŋ)，踴躍用兵(piāŋ)。

〔前に例(a1)として引用。〕

上例(5)・(6)における「坎其」と「其鏜」は、ともに、その前後に述べられている鼓声が高く強いものであることをいっているものである。しかし、例(6)においては、注記しておいたように、その「鏜」は、押韻字として用いられているものである。それで、その「鏜」

(注3) この種の句型における「其」については、《馬氏文通》においても、二つの異なった解説がなされている。《馬氏文通読本》(1986, 上海教育出版社) p. 114の注①を参照。現在、中国においても、なお、説が分かれている。湯可敬氏: <古漢語裏“若是其X”一類的特殊主謂結構>《語言文字學》, H 1, 1987. 9を参照。しかし、「其」の語気詞としての特徴をよくとらえて、この句型をよく説明しているものを、まだ見ていない。

は、例(5)の場合よりも、より高く発声されていたものにちががなく、より高く強い鼓声として述べられているものと考えられる。それで、その「其」は、そのより高く強い鼓声の「鏜」をみちびき出している強い語気のものであったろうと考えられる。

「其」は、前に2・3に述べたように、疑問詞の前後に、強い疑惑の語気を表わすものとして用いられているものである。「其」は、また、上述のように、性状を表わす語の前後に、その程度の高いことを表わす語気詞として用いられている。しかも、この二つの場合を通じて、同じように、その前に用いられている方が、より強い語気を表わしていたものといえる。このようなことは、この二つの場合を通じて、その「其」は、語気詞として、ある共通した働きをしていることを示しているもののように考えられる。疑惑を表わす語気としての「其」は、すでに述べたように、不確定度の高いことを表わす語気である。してみれば、この二つの場合における「其」は、古代漢語においては、一つの同じような類のものであって、それが、その場合によっては、疑惑の語気を表わすものとして、また、その場合によっては、その性状の程度が高いことを表わすものとして働いていたものであろうかと考えられる。不確定度が高い疑惑ということと、性状の程度が高いということとは、古代漢語においては、あるつながりがあることのように感ぜられていたものであろうかと思われる。

「其」の上述のような用法について、何樂士氏らによる《古代漢語虚詞通釈》(1985、北京出版社)の中に、次のように述べている。

用在单音節形容詞(或象声詞)之前,起加強形容的作用,其整個結構跟重音相当。

この書が、この種の「其」について、「加強形容」の働きのあることを説いているのは、注目すべきことと思う。しかし、「单音節形容詞」の後に用いられているものにも、「跟重音相当」の働きのあることを見のがしていることが惜まれる。また、この書の中に、その用例としてあげているものは、前引の《経伝釈詞》の中の例(a1)・(a2)・(a3)だけである。しかし、この種の「其」の用いられる幅は、かなり広がったもののように考えられる。例えば、次の例に見られる「其」の後の語のようなものについても、その性状の高いことを強く引きおこす語気として用いることができたものであったといえることができる。

(7) 物其多矣, 維其嘉矣。(小雅・魚麗, 170)

(第四章,「鄭箋」:魚既多,又善。)

物其旨矣, 維其僭矣。

(第五章,「鄭箋」:魚既美,又齊等。)

物其有矣, 維其時矣。

(第六章,「鄭箋」:魚既有,又得其時。「朱伝」:「有,猶多也。」)

(この例は、「魚麗」の詩の末三章である。)

馬持盈氏訳(第四章):「主人的酒菜真是豐富啊,真是精美啊。」(《詩經今註今訳》1971,台湾商務印書館)

陳子展氏訳(第四章):「物資的多呀,這是它的可嘉呀。」(《詩經真解》1983,復旦大学出版社)

《経伝釈詞》に、この例の詩句につき、「上其猶之也,下其則指物之詞」と説いている。しかし、「鄭箋」は、上下の「其」を同じ働きのものとしているものと考えられる。馬氏の訳は、その「鄭箋」によっているものであるが、陳氏の訳は、《経伝釈詞》によっているもので、取ることはできない。]

3 「乃」と解されていることについて

《経伝釈詞》には、「惟」について、また、「其」についても、「猶乃也」と解される用法があるものとしている。「惟」については、「乃」の転接的な意味の用法を取りあげており、「其」については、その承接的な意味の用法を主としている。《詞詮》には、この用法のことは、全く取り入れていない。楊伯峻氏の《古漢語虚詞》(1981,中華書局)を始め、これにならっている人が多い。

《経伝釈詞》における「惟,猶乃也」という説は、その論拠としてあげている用例も、《書経》・《詩経》の中から、それぞれ、一例をあげているだけであって、たしかに取り入れることのできないものであるということが出来る。しかし、その「其,猶乃也」という説については、《書経》・《詩経》を主として、それぞれ、24例・14例と、多くの用例をあげている。それで、そのあげている用例について、更によく検討してみておかなければならないように思われる。

「其」の語気詞としての基本的な用法は、これまで述べて来たように、不確定なことを表わすということであったということが出来る。それで、その個々の用例を更によく検討してみて、「其」には、やはり、「乃」と解される用法もある、というように思われるようになったとしても、それが「其」における一つの用法として、その不確定なことを表わすという基本的な用法と、どのようなつながりがあるのか、ということが、また、大きな問題となる。

俞敏氏は、その《経伝釈詞札記》(1987,湖南教育出版社)において、「其」について、《経伝釈詞》に「擬議之詞」と解されているものは、「虚擬口气」を表わすものであり、これこそ、その語気詞としての用法に一貫しているものであるとしている。俞敏氏は、この立場からして、《経伝釈詞》に、「其」について、「猶乃也」と解している次の例をあげて、真っ向から反対している。

- (1) 今女其曰,“夏罪其如台”。(商書・湯誓 p. 45)

(この例は、前に2・4に、その例(2)として引用した。その際注記しておいたように、その「孔疏」には、この「其曰」を「其必言曰」と訳解している。すなわち、その不確定度は低いにしても、おそらくきっと次のように言うであろう、と推量していつているものと解している。

王引之は、この「孔疏」に反対して、その「其」を「乃」と解し、このことの前のことを承けていっているものであるとしているのである。また、その論拠として、この「其曰……」は、〈高宗彤日〉（尚書 p. 59）に、「乃曰、其如台」とあるのと同義のものとしている。なお、この〈高宗彤日〉の「偽孔伝」には、「祖己恐王未受其言，故乃復曰、……」と述べている。

俞敏氏は、この例の「其」を「乃」と解することに反対して、次のように述べている。

《湯誓》的「其」明明是「擬議之詞」，通常可以用「若」，跟「乃」的承上接下作用滿不一樣。）

上例について注記しておいたように、その「孔疏」が、本文の「其」を「其必」と訳解しているのは、その当時まで伝承されて来ていたとらえかたであったろうかと思われる。

「孔疏」の中には、次例についても、その「其」を「其必」と訳解しているのであるが、《経伝釈詞》には、その「其」についても、やはり、「乃」と解されるものとしている。

(2) 臣之有作福作威玉食，其害而家，凶于而国。（周書・洪範 p. 75）

〔「作福・作威・玉食」は、人に福を与え、刑罰を加え、珍美な食をとること。「偽孔伝」に、「惟君得專威福，為美食」とあり、「孔疏」に、「臣之有作福作威玉食者，其必害於汝臣之家，凶於汝君之國」とある。〕

なお、「蔡伝」には、「臣而僭上之權，則大夫必害于而家，諸侯必凶于而国」と訳解している。これは、本文の「其」を承接的な「則」の働きのものとしているものといえることができる。）

「其」の語気詞としての基本的な用法という点からすれば、上例(1)・(2)については、俞敏氏にならって、「孔疏」の訳解を取るべきもののようにも考えられる。しかし、上例(2)について注記しておいたように、その「蔡伝」には、その「其」を「則」の働きのものとしており、また、「偽孔伝」の中にも、次の例(3)・(4)について注記しておいたように、その「其」を「則」また「故」とも訳解している例が見られる。次の例(3)・(4)における「其」は、《経伝釈詞》には、ともに「乃」と解されるものとしている。

(3) 惰農自安，不昏作勞，不服田畝，越其固有黍稷。（尚書・盤庚 p. 50）

〔「偽孔伝」に、「昏，強；越，於也。……如怠惰之農，苟自安逸，不強作勞於田畝，則黍稷無所有」とある。〕

《経伝釈詞》には、「越其，猶云爰乃也」と注している。）

(4) 在昔上帝，割申勸寧王之德，其集大命于厥身。（周書・君奭 p. 147）

〔「偽孔伝」に、「在昔上天，割制其義（その道理を切りさばいて）、重勸文王之德（文王の徳を重ねて励まされた）、故能成其大命於其身」とある。〕

《経伝釈詞》の中に、前述のように、「惟」について「乃」の用法があると説いているのは、そのあげている用例も少なく、王引之が、その上下両句の接続関係を、単に意合法的に直感的にとらえるのではなく、その語意の上からしても、より明確にわかりやすくなることを強いて求めようとしたことによる誤解であったと考えられる。しかし、「其」については、そのあげている用例も多く、また、古来の注解によっていることも少なくないのであるから、その所説は、一概に否定することができないようにも思われる。

また、《経伝釈詞》が、その用例の中に、次のように、「其」と「乃」とが、互文的に用いられているものをあげていることも、大いに考慮しなければならないことのように思わ

れる。

- (5) 爾之許我，我其以璧與珪，婦俟爾命，爾不許我，我乃屏璧與珪。(周書・金縢 p. 81)

(武王の病が重くなったとき、周公が周の先王に祈求した言葉。)

「あなたたちがわたくしの願いを許してくださるなら、わたくしはそうすれば(あなたたちに献上する)璧と珪とをもって、帰ってあなたたちの命令をお待ちします。あなたたちがわたくしの願いを許してくださらないなら、わたくしはそうすれば璧と珪とを捨ててしまいます。」

《経伝釈詞》に、「其、亦乃也」と注を加えている。

更に注目すべきことは、《経伝釈詞》の中に、特にその例をあげて指摘しているように、この「其」が、次のように、「乃」と連用されて、承接的な働きをしているものが、よく見られるということである。

- (6) 至于再，至于三，乃有不用我降爾命，我乃其大罰殛之。(周書・多方 p. 157)

〔「孔疏」に、「已至再三，如今而後，乃復有不用我命者，我乃其大罰誅之。」とある。〕

- (7) 彼得政而行其欲，得其所索，乃其釈君。(国語・晋語一)

(驪姫が太子申生を讒言して、晋の献公に言った言葉。)

「彼が政を得て、その望むところを行い、求めていたところを得るならば、そうすれば君をゆるすでしょう。」

「其」は、上述のように、「乃」と互文的に用いられており、また、「乃其」と連語のように用いられていることからしても、やはり、承接的な働きのもので用いられていたことを否定することはできないように思われる。それでは、「其」には、不確定なことを表わす語気詞としての用法と、この「乃」と解されている承接的な用法と、両様の用法があったものといわなければならないのではなかろうか。

「其」が、語気詞として不確定なことを表わすのは、前に2・2において述べたように、そのもともとの遠指の指示詞としての働きが弱化して、ただ、はるか遠いようなふたしかなことの語気を表わすようになったことによるものであろうと考えられる。しかし、「其」は、また、その遠指の働きはゆるく、中指のようにも用いられ、指示詞としても、多くその前に述べたことなどを承指するのに用いられているものである。「其」が、承接的な働きのもので用いられているのは、この中指的に承指する働きが弱化して、単にその前に述べたことを承けて、その次に述べることを引き起す働きをするものになっているのであろうと考えられる。「其」が、不確定な語気を表わすことと、承接的な働きのもので用いられることは、このように、その指示詞としての働きの弱化のしかたによってできて来た二つの用法であると見るべきものであろうと考えられる。

なお、「其」が、《経伝釈詞》の中に、「猶之也」と解され、「朕其弟」(周書・康誥 p. 93)という例があげられており、いわゆる構造助詞のように用いられているのも、もちろん、また、もともとの「其」のもつ承指の働きによるものである。

むすび

漢語は、春秋以後、文末に語気助詞を用いることがきわめて発達し、孤立語的な言語としての漢語における大きな特徴ともいわれている。「乎・哉・矣・也」は、その代表的なものとしてあげられているもので、《論語》の中におけるこの四者の使用数を合計してみると、この四者だけでも、その総字数に対して、約5.6%という高い使用率のものになっている。

《書経》の中には、これら文末の語気助詞といえるものは、きわめて少ない。その〈商周書〉の中において、「哉」が30例、「矣」が7例見られるだけであって、「乎」・「也」は、1例も見られない。しかし、《書経》の中には、その文頭または文中に、語気詞として「惟」・「其」を用いていることが、きわめて多く、その〈商周書〉における両者の使用数を合計してみると、その総字数に対して、約3.9%という高い使用率のものになっている。

「乎・哉・矣・也」は、発話の心情を伝えようとするものである。これらは、話し手の発話の際におけるそれぞれ異なった心情を伝えているものであって、たがいに入れかえて用いることができないものであったといえることができる。《書経》における「惟」と「其」とも、やはり、同じように、話し手の発話の際における語気を伝えているものであり、それで、話し手の発話の心情をとらえるための重要な一つの鍵となるものであったと考えられる。しかし、この「惟」と「其」との語気詞としての違い、その心情の表わしかたの違いということが、これまで、なお、よくとらえられていないことが多いように思われる。それでは、西周以前の漢語における話し手の心をとらえる重要な鍵となるものをみずから放棄しているものといわなければなるまい。

現在多く刊行されている《書経》についての訳注書の類などを見ていて、このように痛感することが多い。特に、《経詞衍釈》に、《経伝釈詞》に不載の義として、「惟、猶其也」と説いていることは、現在においても、直接に間接に、《書経》の読解に大きな混乱を引き起しているように思われる。

私は、さきに、《経伝釈詞》における「惟」の用法についての解説のしかたには、単にその個々の部分の意味がわかりやすくなることを求めて、その「惟」の本質、その用法の基本となっているものを求めようとしなかった大きな誤りのあることを述べた。《経詞衍釈》には、この《経伝釈詞》の犯していた誤りを更に拡大して、「其、猶以也」、「其、猶為也」などと説き、《古書虚字集釈》には、それを更に拡大して、「其、猶必也」などとまで説いている。これは、「其」の語気詞としての本質、その用法の基本的な特徴ということ、全く考慮していないものといわなければならない。これらの大きな誤解は、《書経》についてはもとより、また、《論語》などについても、その発話者の心をとらえようとすることに對して、大きな障害となっているものといわなければならない。

私は、さきに、《経伝釈詞》の権威から早く脱出して、西周以前の漢語の特質に立脚して、「惟」の本質、その基本的な用法を、明確にとらえるようにすべきことを述べた。この語

気詞としての「其」についても、これらの大きな誤解などを、安易に無批判的に取り入れて、古典の原意を誤ることがないように、「其」が語気詞として表わしているその心を、よくとらえてゆくようにすべきことを述べて、この小論の「むすび」とする。

(1990. 9. 24)